

原理としての侮辱

——ゲッツ・クビチェックの主張——

マルクス・ベルナー

中川慎二（訳）

1 まず最初に、ここでお話をさせていただく機会を得ましたことを、金尚均教授に心から感謝します。私の講演ではゲッツ・クビチェックというひとりの人格を例にとり、ペギーダ（「西洋のイスラム化に反対する愛国的ヨーロッパ人」という名の排外主義団体、訳者注）での彼の演説と彼の思想的背景となるイデオロギーとを結びつける政治的なラインを示したいと思います。それにはまず彼の思想の由来をスケッチし、それから二つの演説といくつかのテキストを例にしてクビチェックの思想を描写しましょう。私が前提としているのは、彼の思想が「保守革命」とともに「新右翼」というイデオロギーに由来しているということです。クビチェックが主たる敵をドイツにやってくる人たちに見ているのではなく、政治システムやしたがつて民主主義に見ているという論に焦点を当てます。彼の演説や文章の中で大物政治家たちを侮辱することで、彼はデモの参加者たちに、このような見方に引き寄せようと試みるのです。

ゲッツ・クビチェックは、1970年生まれでドイツ西部出身、徴兵のあとドイツ文学、地理学、哲学を専攻し、教員になるのが目標でした。彼は、1920年「民衆の心情、軍人的態度と20世紀初頭の青少年運動の信仰告白的衝動」¹という指針の輪郭を形作った「ドイツ・ギルド組合」のメンバーでした。この3つの点が今日のクビチェックにも当てはまることをお示ししましょう。クビチェックの重要性が際立つのは、彼が「アンタイオス」という

小出版社のオーナーであるだけではなく、「国家政治研究所」の創設者の一人でもあるからです。この研究所はドイツでは標準的な右翼の思想製作所として通っており、クビチェックが妻と子供たちと暮らしている建物に所在しています。ドレスデンではペギーダという名前で、ライプツィヒではレギーダという名前で右翼デモが開催されるようになってから、ゲッツ・クビチェックは演説と「独立」に掲載された文章を通してデモに影響を与えてきたのです。彼は「独立」という「国家政治研究所」の新聞の編集責任者なのです。彼は、教育、出版可能性と個人的な行動主義を結びつけることで、最も重要なドイツの現代右翼インテリとなっているのです。

2 長い間ドイツでは、右翼インテリの時代は終わったと考えられていました。ワイマール共和国ではさらに事情は違っていたのです。つまり、そこでは反リベラル、反民主主義、そして反平等の考え方を支持する人たちが広くおり、またその考え方を堅持する代表者たちもいたのです。1950年アルミン・モーラーは、これらのさまざまな人たちや集団を描写するのに依然としてまさに評価の定まらない「保守革命」という概念を提唱したのです。モーラーはこの350人ほどの人たちの集団を肯定的には定義せず、ワイマール共和国に対して抱く共通した対抗意識によって定義したのです。この人たちの集団には、モーラー以外にはオトマール・シュパン、カール・シュミット、エルンスト・ニキッシュ、マーチン・ニーメラー、オスヴァルト・シュペングレーやエルンスト・ユンガーのような多様な顔ぶれの作家たちがいたのです。彼らの著作は、当時カトリックのドイツ国家という環境のもっていた保守主義とも対置される右翼保守主義に特徴づけられています。彼らは党派をもたず活動していて、政治的にはフランス革命からも一線を画しているのです。フランス革命が退廃的な政治理念と原理を権力にもたらしたと非難したのです。その目的は、もしそう言ってよければ、一定の「大きな秩序」を再び打ち立てることだと言えます。トーマ

ス・マンによると、フリードリッヒ・ニーチェが特定の概念を対立的に置かず、共に用いていたことで、保守革命の理想的なタイプと言えるのです。たとえば、啓蒙と信仰、精神と肉体、神と世界のようなものです。保守革命に分類された、総じて出版人である最重要人物たちは、以下の二つの典拠から自分たちの見解を引き合いに出しています。つまり、ドイツの政治的ロマン主義と第一次世界大戦という経験なのです。そこから爆発的な混合が起こったのです。つまり、政治的な軍人気質がロマン主義の映像と結び付けられたのです。この結合は、リベラルで合理的な組織に対置されます。1960年代にドイツ連邦共和国では新右翼の観念が発達しました。つまり、新右翼は国家社会主義からは切り離されねばならないし、新たな道を見出さなければならなかったのです。2009年には国家政治研究所と右翼のドイツ新聞「青少年の自由」との間で「新右翼」の概念を巡って論争になりました。研究所とクビチェックが拘ったのはそこなのです。

2016年10月16日にゲッツ・クビチェックはドレスデンでペギーダの「2回目の設立記念日」の催しで話をしています。「ドイツ東部は持ちこたえず」という題で要約できる演説の中で、彼はとりわけあるテレビ番組について話しています。「厳しいけど公正！」という名のテレビ番組は、ドイツではいつも月曜日に放送されています。その番組は有名で、いくつもの賞を取っていきまして、しばしば印刷メディアによっても報道されています。番組のコンセプトにより、特定のテーマが中心にくるように構成されています。司会者はありうる限りの様々な立場にある5人のゲストを迎えて、挑発的に表現された主要な質問をするのです。この番組はクビチェックが関わった2016年10月10日版では「統一？そんなことはあてにしない。どうしたというのだ、兄弟姉妹たちよ？」²という題で2016年10月3日のペギーダ・デモを巡って撮影されました。この日であればドイツでは祝日の枠組みで「ドイツ統一」のことが思い起こされます。この目的のために、なかでも連邦首相のアンゲラ・メルケルと当時の連邦大統領であるヨアヒム・

ガウクは祝賀行事に列席するためにドレスデン市を訪問したのです。そこでは政治の代表者が罵倒されたのです。以前のペギーダ・デモの時と同様に、「国民の裏切り者」「帰れ!」「メルケル退陣!」「私たちが当の国民なのだ」という言葉が使われたのです。ドイツ統一はこの2016年10月3日にはペギーダでも主な話題だったのです。舞台ではこの日にはクビチェックも「新しいドイツ分割」と「国民の中にある亀裂」について話していたのです。この亀裂が可視的になるのは、ペギーダ・デモの参加者が国の来賓に対しておこなう野卑な言動や罵倒の言葉が限度を超えてしまい、そのあとの報道では異口同音にそのことについての恐怖が支配的になるときです。この出来事に取り組み、広範なメディアの反響を描き出すために、「厳しいけど公正!」という番組の司会者は、したがって5人のさまざまな人たちを招いて、ドレスデンで起こったことについて2016年10月10日に議論したのです。ゲストは、なかでもノルトライン・ヴェストファーレン州のキリスト教民主同盟代表のアルミン・ラシェットとドイツの週刊誌「シュテールン」元編集長ミヒャエル・ユルクスでした。ユルクスは、ペギーダ・デモは国家社会主義とドイツ民主共和国の時代が人々の頭脳の中で引き起こしたことを示す例であるという説をもちだしたのです。アルミン・ラシェットは、ペギーダの野卑な言動を理解できないと表現したのです。というのも、東部の都市とは違ってむしろ西部の都市の方が現実の問題を抱えたのだからというのです。西部の都市が負債を受け入れ、1989年以降東部での開発経費を支払い、これらの借金をただただ抱えているのであると。ゲッツ・クビチェックがこの番組を話題にするとき、一人一人のゲストが言ったことを彼は問題にしないのです。むしろ彼は、個人的な意見と表面的な効果を入り混ぜてそれらのゲストを描写するのです。クビチェックはジャーナリストユルクスのことばで始めるのです。

あいつは、政治学とドイツ文学の専攻を途中でやめたのにもかかわらず

ある椅子から次の椅子へと引き上げてもらった、つまり出世したようなタイプなのである。その理由は一つだけだ。当時は68年の学生運動のさなか、鉛筆をくるりと左に回すことさえできたら、誰でも仕事にありついていた時代だったのだ。厚かましくも戦争世代を倫理的に裁こうとすれば、だれでもが出世したのである。ミヒャエル・ユルクスは待ち伏せして獲物を射とめるひどい射手なのだ。ゴシップ記者なのだ。戦後の不当利得者である。「小心者」を嫌うやつ。うぬぼれたデブの役立たずで、豚のような小さな目を瞬かせるようなタイプで、同郷人に何も認めようとしない。ドイツ的なものに堪えられないタイプ。

ユルクスはクビチェックにとっては「出世した」だけの「タイプ」なのです。というのは、そういう左翼の時代精神のおかげで彼にはそれができたのですから。この左翼精神が目的としていたのは、「厚かましくも戦争世代を倫理的に裁こうとする」ことなのです。このような評価は、この頃はあまり聞かれなくなっているとはいえ、ドイツでは珍しくありません。「戦争世代」の多くの人たちがすでに死亡していること、とりわけ基本的に「左翼」と自称する出版人が、例えばこのことがまだ当てはまっていた70年代よりも、かなり減ったことと関係があるのです。激怒してクビチェックはその後にも演説したのです。つまり、クビチェックがユルクスを、「豚のような小さな目を瞬かせる」うぬぼれたデブの役立たずだと描写することで、彼はユルクスを社会の中で倫理的に落ちぶれた寄生虫の方へ追いやるのです。彼がユルクスを戦争の不当利得者であり、ゴシップ記事を書くような奴だと罵倒することによって、彼はこの印象を強めているのです。「戦争の不当利得者」という表現には、ドイツでは二つの政治的意味があります。つまり、ソビエト連邦の占領地区では第2次世界大戦中に戦争用物品の生産によって金を手に入れてきた企業家がそうように呼ばれたのです。他方では、不釣り合いな程度に莫大な利益をうまく手に入れるために、戦時中の

困窮した状況を実際に利用したり、利用したと思われた人々や組織はさらに広い意味で暗示的にそう呼ばれているのです。この意味は、「まじめな仕事を吸い尽くす」ことで生きながらえている不当利得者というユダヤ人排斥主義のステレオタイプに結びつけられるのです。しかし、クビチェックの罵倒はさらなる地平を内包しています。というのは、彼がユルクスを「待ち伏せして獲物を射とめるひどい射手……ドイツのなものに堪えられないタイプ」であると呼んでいるからです。ここに現れているのはクビチェックの「政治的な軍人気風」との関わりでして、それは問題なくその背景のイデオロギーにさかのぼることができます。クビチェックの場合も、次のように発言する時には、暴力への呼びかけがないわけではないのです。つまり、「ミヒャエル・ユルクスは決定的な裁判官の非難に対して何ら回答をもらうどころか、むしろその次には和解の余地なくスタジオから椅子もろとも放り出されるべきだったのだ」と。そうすることで彼はテレビ番組の中で自分の意見を表明するような人に対する暴力を言葉で表現しうるものにしているのです。それから、クビチェックはさらに、長年地位を確立したキリスト教民主同盟の政治家であり、しばしば議論のセッションに招待されるアルニム・ラシェットに向かうのです。このことは、一方では彼が雄弁に自分の考えを表現することができるということと関係があり、他方では彼がキリスト教民主同盟の最もメンバーの多い州連盟の会長であるからなのです。ラシェットについてクビチェックは：

「ラシェットは肉となった快感ゾーンである。彼は24時間営業のビュッフェの雰囲気を広めていて、そして、もし彼がただ自分の人生を享受し、他の人たちのお金で彼ができることを強烈に自分の中に拘い入れているのだとすれば、私たちみんながすでに勝ったのだと言っていいくらいです。いや違う。ラシェットはぜひとも政治をしなければならない。」
AfD（党名「ドイツにとっての選択肢」訳者注）が彼を交替させる時期

がくるのだ。

3 このように彼はドイツで有名な右翼の標語を参照するのです。その標語には、政府が軽はずみにもその「国民」を交替させると書いてあるのです。クビチェックはある物語を彼の描写の中に組み込んでいるのです。西ドイツ人と東ドイツ人との間の根本的な差がどこにあるのかを、どこかで一度読んだことがあると言っているのです。つまり、東ドイツ人は依然としてドイツに居ながらにして、ある政治システムが破棄されてしまうこともあるのだということを、東ドイツ人が1989年90年の転換点とともにすでに一度経験しているという点に根本的な差があるのだと。西ドイツ人はこの経験をしたことがないので、連邦共和国をドイツだと勘違いしているのだと言うのです。ドイツというのは、「政治システムの上部にある」何かのことだと、東ドイツ人は理解しているのだと言うのです。ここでクビチェックが強調する考え方は、彼が様々な場所ですでに表明したものです。つまり、彼が言うには、「大きな秩序」と「小さな秩序」があるのだということです。この二元論について彼はすでに、それより1年前の2015年10月7日に、国家政治研究所の機関紙「分離」のブログで書いたのです³。この報告でもその引き金となるのが、「ドイツ統一の日」の環境の中で行われたベギーダ・デモなのです。2015年10月5日に彼はドレスデンで言ったのです。

アンゲラ・メルケル、ヨアヒム・ガウクや他の政治的に責任ある人たちはドイツを吸引カップにしてしまった。つまり、この吸引力は、実際に困窮に陥りヨーロッパを渡り歩き私たちのところにたどり着く人たちだけでなく、とりわけ無数の金鉱探しをする人たちを引き寄せているのだ。彼らは一つのことだけを知っている。つまり、お宝を探し当てるのにドイツでは鍬やシャベルなどはいらないのだということ、そして福祉

事務所が近くならどこにあるのかを知っていれば十分だということを。⁴

彼が政治家のお歴々を非難したのは、——彼らは1年後にはドレスデンで罵倒されることになるのは記憶にあると思いますが、——彼らが分かっただけで「金鉱探しをするひとたち」を国に招き入れて、彼らがお宝を探し当てられるようにしているという点なのです。このお宝はクビチェックの認識では、ドイツの社会システムに基礎をおいているお金以外の何物でもないのです。それで彼が言っているのは、国家のお歴々は「寄生虫」に支援をしているということだけなのです。そのことを避けるためには、とクビチェックが提案しているのですが、彼の言う「小さな秩序」は損なわれてしかるべきだということなのです。そのプロセスを、彼が「平和裏」と表現する例で描写するのです。彼は演説では3つの抵抗の形に触れています。つまり、デモ、自主的な境界線の画定とブロック、つまり難民庇護希望者の収容施設をブロックすることなのです。この要求をめぐるのは混乱があったのです。というのも、この要求が報道によっては暴力の行使への要求だと理解されたからです。

4 クビチェックの国家についての自然主義的な概念をさらに徹底するには、彼の演説をさらに見てみるだけで十分でしょう。

私は我が国の政治的指導部には、配慮もせず堂々と我が法秩序を解体し新連邦州（東ドイツのこと、訳者注）にも過剰に違和感を与えていることに、基本的には感謝している。このプロセスは西側ではじわじわ忍び寄る熱のように経過した。そして、ついにこの内面の脆弱さと外部からの脅迫とが入り混じった状態が公に明らかになったのだ。今亀裂がでるのはいいことなのだ。このじわじわ忍び寄る熱よりも私たちにとっ

で好ましいのは開いた肉体の傷なのである。ただそのように、この恐怖はこの国の骨にしみいるのである。

これにはクビチュクの国家像がとりわけ際立っています。この「メタ国家」は、クビチュクがその名前で意図して語っているのですが、民族の「血と大地イデオロギー」以外の何物でもないのです。そのすべてが、過去に深く根付いており、同時に強く現在に適応した考え方の例なのです。というわけで、最後に、クビチュクは今日ドイツ右翼の中でも最も危険な人物であるという私の論を示します。この危険性は次の論点から来ています。

- ① 彼は「保守革命」の原理を取り上げて、それで2つの観点を議論に差し戻している。つまり、一つには「政治的軍人氣質」であり、もう一つには「有機的国家」、「大きな秩序」という概念である。
- ② 政治システムに反対する扇動はクビチュクの中心的テーマである。というのも、彼は国家ならびに民族から考えているのであり、個々の人間から考えているのではないから。そのために彼は国家を代表する人たちを侮辱しなければならないのである。クビチュクは演説で、ある調子を促進しているが、その調子の中では侮辱的発言であっても普通の政治的な発言だと思われるのである。侮辱された人たちが侮辱的発言から身を守ろうとすると、彼はそれを、国家の代表者たちが「民衆」に反対していることの例だというのである。なぜならば、「民衆」が先に代表者たちを侮辱したのだからと。
- ③ 侮辱で彼が正当化しているのは、民主主義の法治国家に対する抗議である。しかし、積極的な国家との闘争という意味ではなく、国家を代表する人たちを笑いものにして国家を代理するという意味である。この代理は、したがってクビチュクの信奉者が国家の役割を担うことによって、

体制順応的な反乱という結果にしようとしている。クビチェックが追いかける目的がそれなのだ。

原注

- 1 Helmut Kellershohn: Die selbsternannte Elite. In: ders. (Hrsg.): Das Plagiat. Duisburg 1994. S. 64.
- 2 [http://www.ardmediathek.de/tv/Hart-aber-fair/Einheit-Sie-pfeifen-drauf-Was-ist-da-l/Das-Erste/Video?](http://www.ardmediathek.de/tv/Hart-aber-fair/Einheit-Sie-pfeifen-drauf-Was-ist-da-l/Das-Erste/Video?bcastId=561146&documentId=38229576)
[bcastId=561146&documentId=38229576](http://www.ardmediathek.de/tv/Hart-aber-fair/Einheit-Sie-pfeifen-drauf-Was-ist-da-l/Das-Erste/Video?bcastId=561146&documentId=38229576)
- 3 <https://sezession.de/51755>
- 4 <https://sezession.de/wp-content/uploads/2015/10/pegida510.pdf>